

第5回 文久3年、将軍家茂の上洛

—「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むI—

巻島 隆

はじめに

今回から最終回まで、風説留「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書、群馬県立文書館蔵)を読みます。風説留とは様々な手段で聞き知った情報を記録として書きとどめた史料です。1980、90年代から“情報”に焦点を当てた歴史研究が進み、江戸時代の人々がどのように情報を得て、また情報に基づく行動をしていたのかという観点から史料としての風説留も注目されるようになりました。

第1回 くずし字に触れる

第2回 読むための基礎知識

第3回 「和宮下向ニ付、助郷取極」(伊勢崎市図書館蔵)を読む

第4回 今井区有文書(赤堀歴史民俗資料館蔵)を読む

第5回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むI

第6回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むII

第7回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むIII

第8回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むIV

1 時代背景

江戸幕府成立期と幕末期の大きな違いとは一。

軍事力と政治力で天下統一を果たした徳川家康。幕府が朝廷に対して力が強かった象徴的な出来事が紫衣事件。寛永4年(1627)、皇室から大徳寺・妙心寺に紫衣を賜った行為が禁中並公家諸法度に触れるとして、幕府が問題視。抗議した大徳寺の沢庵宗彭らを流罪に処した。これを機に後水尾天皇が攘夷。

ところが、幕末期には大政委任論(幕府が朝廷から大政を委任されているという考え)と、朝廷・天皇を敬う尊王思想が普及(上野国新田郡細谷村出身の高山彦九郎)していた。朱子学(大義名分論、一君万民)や国学の影響。

嘉永7年(1854)8月、日米和親条約が締結。開国論と尊攘論が対立。安政3年(1856)、アメリカ総領事ハリス来日。安政4年(1857)、日米修好通商条約の交渉が開始。将軍継嗣問題が起こり、紀州派(井伊直弼ら譜代大名)と一橋派(徳川斉昭、阿部正弘、島津斉彬、松平慶永ら)が対立。

安政5年2月、老中堀田正睦が京都で日米修好通商条約調印の勅許を得ようと工作するも3月に孝明天皇が調印拒否の勅答。朝廷の勅許を得ないまま幕府は日米修好通商条約を締結し、他国とも通商条約(安政5か国条約)を結ぶ。横浜など開港へ。7月に家定が死去。9月、紀州派が実権を握ると、一橋派・尊攘派を弾圧。安政の大獄始まる。10月に徳川家茂が将軍職就任

安政の大獄と無勅許条約への反発が万延元年（1860）3月3日に桜田門外の変。5月、幕府は、公武一和（朝廷・幕府が一致して国難に当たる）のため家茂の正室として孝明天皇の妹和宮の降嫁を請願。文久元年（1861）10月、和宮が降嫁。文久2年正月、公武一和を進める老中安藤信正が襲撃される（坂下門外の変）。同年2月、家茂と和宮の婚儀。4月、薩摩藩の率兵上京。勅使大原重富と共に薩摩藩兵が江戸へ下る。幕政改革を要求。その結果、7月に徳川慶喜が将軍後見職、松平慶永が政事総裁職に就任。8月に生麦事件。閏8月、会津藩主松平容保が京都守護職に就任。

文久3年3月4日、家茂が上洛。3月、賀茂行幸、4月、石清水行幸。5月10日、長州藩が下関で外国船を砲撃。6月1日、米艦隊による長州藩への報復攻撃。6月13日、家茂が大坂を出航。7月2日、薩英戦争。8月17日、天誅組の変（9月27日に壊滅）。8月18日、八・一八のクーデター（長州藩、攘夷過激派公卿の追放）。12月、朝廷が徳川慶喜、松平容保、松平慶永、山内豊信、伊達宗城（翌年に島津久光も）を参与に任ず（参与会議、文久4年3月まで）。

文久4年（1864）正月15日、家茂入京。元治元年（1864）6月5日、池田屋事件（新選組による尊攘派浪士の襲撃）。同年7月19日、蛤御門の変。幕府が西南21藩に出兵を命ずる（第1次長州戦争）。8月5日、4か国艦隊が下関砲撃・占領。11月、長州藩3家老切腹。

慶応元年（1865）正月長州藩士高杉晋作ら馬関を再度襲撃し、占拠（2月に藩論を幕府への対抗に統一）。5月、幕府が紀州藩主徳川茂承を征長先鋒総督に任ずる（第2次長州戦争の準備）。6月、薩摩藩の西郷隆盛が京都で坂本龍馬と会見し、長州藩の武器購入助力を約す。9月、幕府がフランスの協力を得て横須賀製鉄所（後の横須賀造船所→横須賀海軍工廠）を起工。

慶応2年正月、薩長密約。4月、薩摩藩が幕府に対し、長州戦争への出兵拒否。6月、第2次長州戦争の戦闘開始。7月2日、老中板倉勝静が仏公使ロッシュを兵庫に訪れ、軍艦など購入斡旋を依頼。7月20日、家茂、大坂城で死去。9月2日、幕府・長州藩休戦協定。12月5日、慶喜が将軍職に就任。12月25日、孝明天皇崩御。

慶応3年正月9日、睦人親王践祚（即位、後に明治天皇）。3月28日、慶喜が英仏蘭（後で米とも）代表と会い、兵庫開港を約束する。5月21日、薩摩藩と土佐藩の討幕密約。6月、坂本龍馬「船中八策」。6月、幕府が大坂の富商20人に商社結成、兵庫開港資金の拠出を命ずる。7月、岩倉具視、大久保利通（薩摩藩）が王政復古を計画。9月、薩長芸3藩、討幕密約。10月3日、土佐藩が幕府に大政奉還を建白。10月13日、岩倉具視が薩摩藩に討幕の密勅、長州藩に藩主の官位復旧の宣旨を渡す。慶喜は在京10万石以上の諸藩重臣を二条城に集めて大政奉還を諮問する。10月14日、慶喜が大政奉還上表を朝廷に提出。同15日、慶喜が参内して大政奉還勅許の沙汰書を受ける。12月7日、兵庫開港・大坂開市。12月9日、王政復古の号令。

2 様々な国家構想

①**公議政体論**＝朝廷の下での大名連合政府。②は①を組み込み、③は①を実現させるための手段、④は幕府を排除した形の①。その試みとして文久3年～文久4年（元治元年）、参与会議（一橋慶喜、松平慶永、伊達宗城、山内豊信、島津久光）→挫折。英国公使館通訳アーネスト・サトウの「英国策論」（慶応2年に「ジャパントイムズ」に投稿、要は天皇と将軍の二元体制の矛盾を喝破し、将軍（大君〈元首〉は大君ではない）は一諸侯と位置付けた。だから通商条約も一諸侯と結んだものに過ぎず、日本国と結んだものではなく、新たに条約を結び直すべきと主張する）

②**幕府主導の近代国家構想**＝将軍徳川慶喜の下で小栗忠順主唱の兵制改革、郡県制度、近代化施策。慶応3年の西周（慶喜側近）による「議題草案」（幕府の憲法草案）。要はヨーロッパの三権分立を日本風アレンジして二権分立（行政の公方政府〈慶喜が元首、司法権を兼ねる〉、立法の議政院〈上院＝大名、下院＝藩士〉で国政を運営。朝廷は山城一国に制約）を構想。議政院は①のアレンジ。

③**大政奉還論**＝①と連動しており、幕府は大政を奉還し、徳川家は一大名として①を推進すると主張する。大政奉還の前提となる考えが「大政委任論」。朝廷から政権担当を任されているとする大政委任論（天明8年、松平定信が11代将軍家斉に表明）によって幕府の存在を正当化した。③は文久2年（1862）の段階で幕臣の大久保一翁が提唱。慶応3年に④に対抗した土佐藩の藩是（一翁→坂本龍馬→後藤象二郎→山内容堂）となる。③の遂行の後、徳川家も一大名として公議政体論に基づく新たな政府に参加する。

④**武力討幕路線**＝幕府を排除した形の①の推進。長州・薩摩・芸州藩が主唱。元々公武一和派であった岩倉具視、文久の改革を促進した薩摩藩も共に幕府を前提とした国政を構想していたが、慶応2年（1866）に薩長同盟を結び、第二次長州征討への出兵を拒絶。幕府を軍事力によって倒し、新たに政府をつくろうと構想。王政復古。小御所会議で徳川慶喜の辞官納地を決定する→戊辰戦争へ。

*経済的には安政6年（1859）に横浜が開港し、国際貿易が始まる。為替レートの金銀交換比率の差異により日本国内の金が国外流出、生糸輸出による生糸相場の高騰、また諸物価高のインフレーションを招く。

3 徳川家茂

家康が心の支えになっていたと思われる。
↓寛永・慶安期(かんえい・けいあんき)
【参考文献】『徳川実紀』二・三、広野三郎
『徳川家光公伝』辻達也『寛永期の幕府政
治に関する若干の考察』(『横浜市立大学論
叢』人文科学系列二四ノ二・三(合併号))

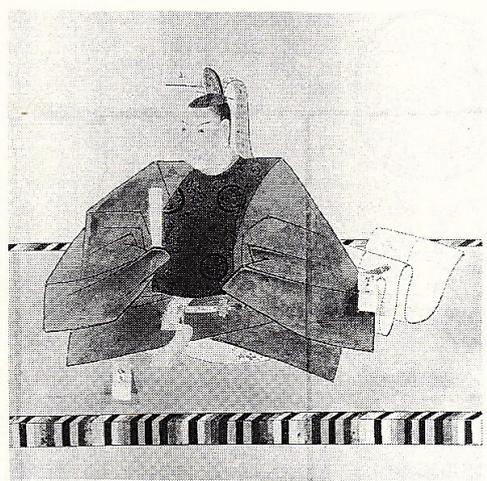
(辻 達也)

とくがわいえもち 徳川家茂 一八四六―一八
六 江戸幕府第十四代将軍。一八五八―一八六
六 在職。弘化三年(一八四六)閏五月二十四日誕
生。和歌山藩主徳川齊順(なりより)の長子、
母は同藩士松平晋の女みさ(実成院)。幼名は
菊千代。同四年四月和歌山藩主齊疆(なりか
つ)の養子となる。嘉永二年(一八四九)閏四月
藩主となり、同四年元服、将軍徳川家慶より
偏諱を与えられて慶福と改名した。将軍継嗣
問題においては一橋家主の徳川慶喜に対して
より有力な候補者であった。安政五年(一八五
八)六月将軍継嗣に選定され江戸城に入った。
七月六日十三代将軍家定が死去、同月二十一
日名を家茂と改めた。十月二十四日正二位権
大納言、翌日内大臣・征夷大将軍の宣下があ
り、十二月一日江戸城で宣旨伝達をうけた。
幼少であることから、家定の遺命として、徳
川慶頼が将軍の後見となった。将軍継嗣問題
と条約調印問題をめぐる政争のなかで、幕府
の支配力は動揺しており、この回復のために、
家茂と孝明天皇異母妹和宮親子内親王(仁孝天
皇の第八皇女、のち静寛院宮)との婚姻が進め
られた。幕府は、「七八ヶ年乃至十ヶ年」後の
攘夷を実現することを誓約して天皇の許可を
得、文久二年(一八六二)二月江戸城において
婚儀となった。同年五月、徳川慶頼が後見の
座を退き、将軍親
裁の体制が成立し
た。同年六月、勅
使大原重徳が島津
久光に警護されて

江戸に入り、朝廷の意志を伝えた。幕府はこ
れを容れ、同年七月、慶喜を将軍後見職に、
松平慶永を政事総裁職に任命した。以来、家
茂は慶喜の華やかな行動の影にかくれがちで
表立つことは少なかったが、血における正統
と温順と伝えられる性格、ならびに実正な姿
勢により、幕臣から強い忠誠を得て君主と
しての地位を固めていった。同三年三月上洛
公武合体の推進を図ったが尊攘運動の攻勢に
さらされて賀茂社行幸に供奉、石清水行幸は
病に託してこれを辞したが、強要されて攘夷
期限を五月十日と奉答、六月に東帰した。翌
元治元年(一八六四)正月に再上洛、参予会議
を後援して公武合体の実現に尽力したが、会
議そのものが解散し、江戸に帰った。第一次
征長の後、幕府はみずから長州処分を行おう
として将軍進発を令告、家茂は慶応元年(一八
六五)五月江戸を出立、入京参内したのち大坂
城に入った。同九月二十一日、朝廷は長州征
討を許可した。時を同じくして、英・仏・
米・蘭四カ国の代表が四国連合艦隊に搭乗し
て大坂湾に来航、条約勅許・兵庫先期開港・
関税率改正を要求した。幕府は先期開港を回
答することに決定、急を聞いて京より大坂に
入った徳川慶喜はこれに反対、外国側に回答
期限の延期を承認させた。朝廷は幕府の態度
を批難し、阿部正外・松前崇広の二老中に対
して、官位剝奪と国許謹慎を命じた。公然た
る幕府人事への介入である。幕議はこれに反
撥し、家茂は将軍職辞任とこれを慶喜に譲る
ことの上書を提出し、大坂を出立して江戸に
向かった。ここに幕府ないし徳川家は分裂の
危機に直面したのである。慶喜は将軍東帰の
中止を建言し、条約勅許の交渉にあたった。
十月五日、朝廷は条約を勅許するとともに将
軍辞表を却下した。翌二年正月、長州処分案
が決定された。長州藩はこれの受諾を拒否、
六月七日、征長軍と長州軍との戦闘が始まっ

た。そして、七月二十日征長軍敗報の相つぐ
中、家茂は大坂城中に病没した。年二十一。
八月二十日に至り発喪、遺骸は海路を江戸に
送られ、増上寺(東京都港区)に埋葬された。
法名は昭徳院殿。 ↓和宮降嫁問題(かづのみ
やこうかもんだい) ↓将軍継嗣問題(しょう
ぐんけいしもんだい) ↓文久・慶応期(ぶん
きゅう・けいおうき)
【参考文献】『続徳川実紀』三・四、洪沢栄一
『徳川慶喜公伝』堀内信『昭徳公御記』(『旧
幕府』二ノ一・二) (井上 勲)

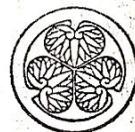
とくがわいえやす 徳川家康 一五四二―一
六一六 江戸幕府初代将軍。一六〇三―一
六一六 在職。太政大臣。三河国岡崎の城主松平広忠
の子として、天文十一年(一五四二)十二月二
十六日に生まれた。幼名は竹千代。母は同国
刈谷の城主水野忠政の娘で、名はお大(没後に
江戸の伝通院に葬られ、法名を伝通院殿とい
う)。当時の松平氏は、今川氏と織田氏との両
勢力にはさまれた弱小の大名で、広忠は今川
方に属したが、忠政の子の信元が織田方に転
じたので、竹千代が三歳の時、お大は離別さ
れて刈谷に帰り、のち尾張阿久比の城主久松
俊勝に再嫁した。竹千代は六歳で今川氏に人



徳川家茂画像

『国史大辞典 10』(吉川弘文館)

第一四代 家茂



家茂は四歳で紀州家を継いだ。とにかく大藩の後嗣なので、重臣達は聡明に成長することを願っていた。そこである時、波江という彼の誕生のときから付いていた老女が、表役人の某が役替えになるといっているので、何役に替えられるのか、と慶福(幼名)に訊ねてみたところ、彼は明日になれば公表されてわかることだといって明かさなかった。そこで波江は、夜になって子守歌など聞かせながら寝かせつけている時に、某はどういうお役替えになるのだろうか、とまた訊いてみたが、慶福はやはり、まあ明日まで待てといてついに明かさなかった。彼の将来に安堵したという。常々、家老から、政治向きのことはいかに親しくしていても、女子供にみだりに話すべきでないと教えられていたことを、幼い彼が守ったからである。

△昭徳公御記▽

將軍に就任して間もなく、反幕勢力への融和策として、井伊直弼を譴責する意味で、井

▲物語一五代將軍列伝▽

伊家に一〇万石の削封を命ずる閣議が決した。側用取次の大久保忠寛(一翁)は「直弼侯横死の節は世間への影響を考え、死を内密にするよう命じておきながら、こんどは死を隠したからといって減封するとは幕府の信義を問われましょう」と將軍への取り次ぎを拒否した。このため大久保忠寛は、翌日、講武所奉行に職を転ぜられた。このいきさつを聞いた家茂は、「そちの申すことが道理である。しかし老中たちの決めた人事をわし一人の力ではどうしてやることもできない。どうか腹を立てずに勤めてくれ」とむしる忠寛を慰めた。

△開国始末▽

朝幕関係の円滑を図るため、御台所に迎えた和宮との間柄は、必ずしも円満とはいえなかった。將軍家には、毎朝、中奥から大奥へ渡る「総触れ」という日課があり、このとき、御台所は御小座敷まで迎えに出るのが慣わしになっている。が、和宮はしばしば病氣と称してこれをせず、逆に家茂の方から一の御殿へ出向いており、この気位の高い正室のご機嫌をとるため、事あるごとに色々な品を、

彼女だけでなくお付きの下級女中にまで贈ったりしている。後に松平慶永に対してこの努力の心中を「公武合体の実を上げるためにはなによりも、宮様との間柄を大事に、仲睦くしていれば自然と成ること、誠意のない形ばかりのことではならないのだ」と明かしている。

△再夢紀事▽

正式な記録として、歴代將軍中、側室、愛妾のいかなかったのは、八歳で夭折した七代家継とこの家茂だけということになっている。が、將軍に世子ができないのは重大事であったから、重臣達は子供を産む気配のない和宮に懇願して、家茂に侍妾をすすめる許しを得ている。で、その候補者の選定に、和宮は家茂と一緒に「御庭御目見」というすき見をしたが、家茂の意にかなわずなかなか決まらなかったという。やっと慶応元年、上洛寸前に根岸に住む一七、八歳の旗本の娘が決まったと伝えられている。

△和宮御側日記▽

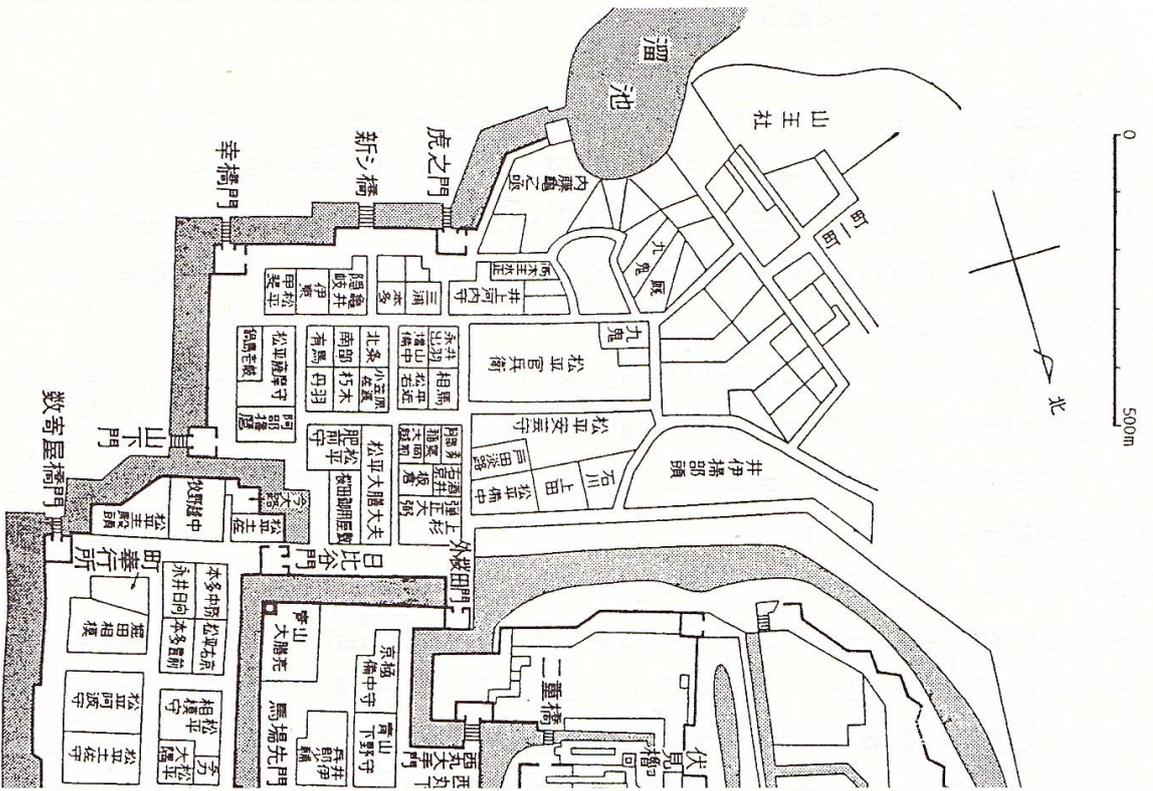
山本 大著

四六判 1200円

真説坂本竜馬

『歴史読本臨時増刊号 徳川將軍家人物総覧』
(新人物往来社、一九七七年)

図 1 1807年頃の江戸城内郭



以下、レジメの夏まで深井雅海『江戸城―本丸御殿と幕府政治―』(中央公論社、中公新書、二〇〇八年)

註 村井益男『江戸城』(中公新書45)の折り込み図より引用

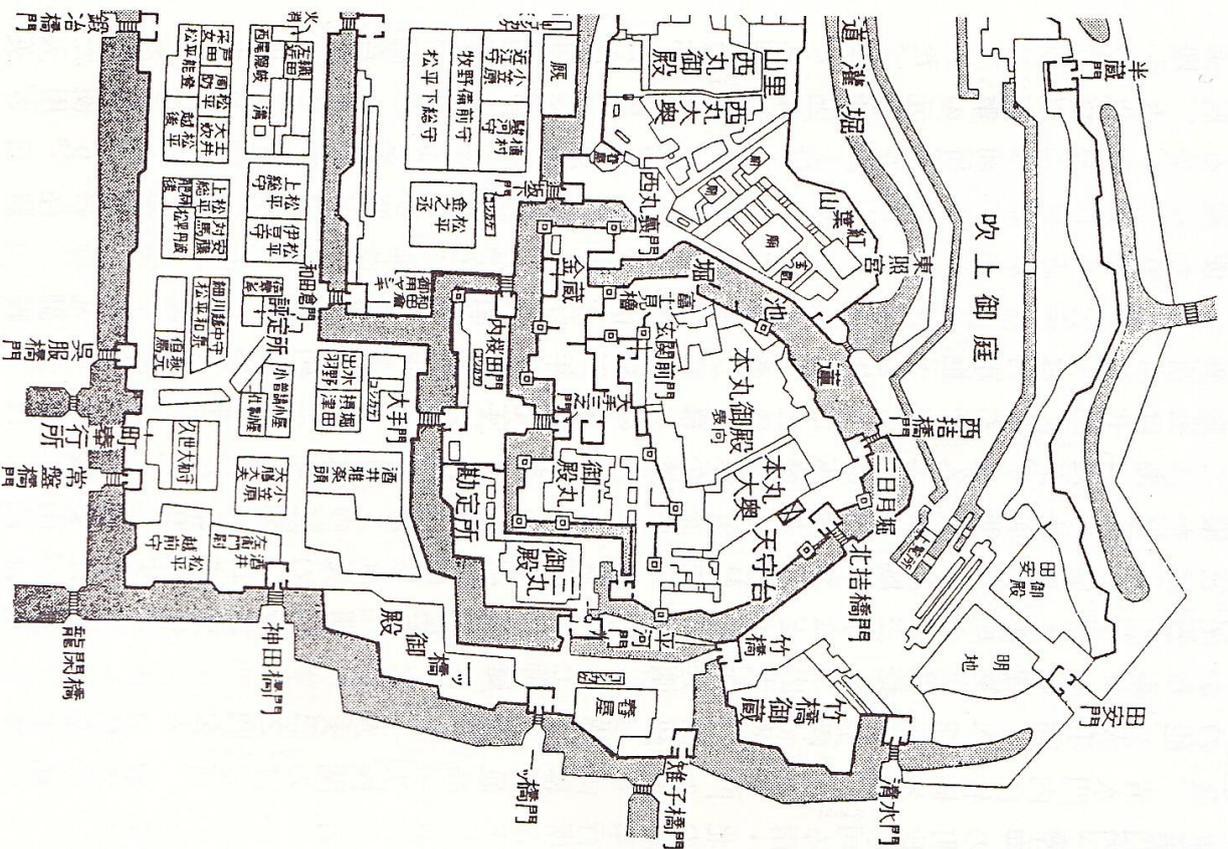
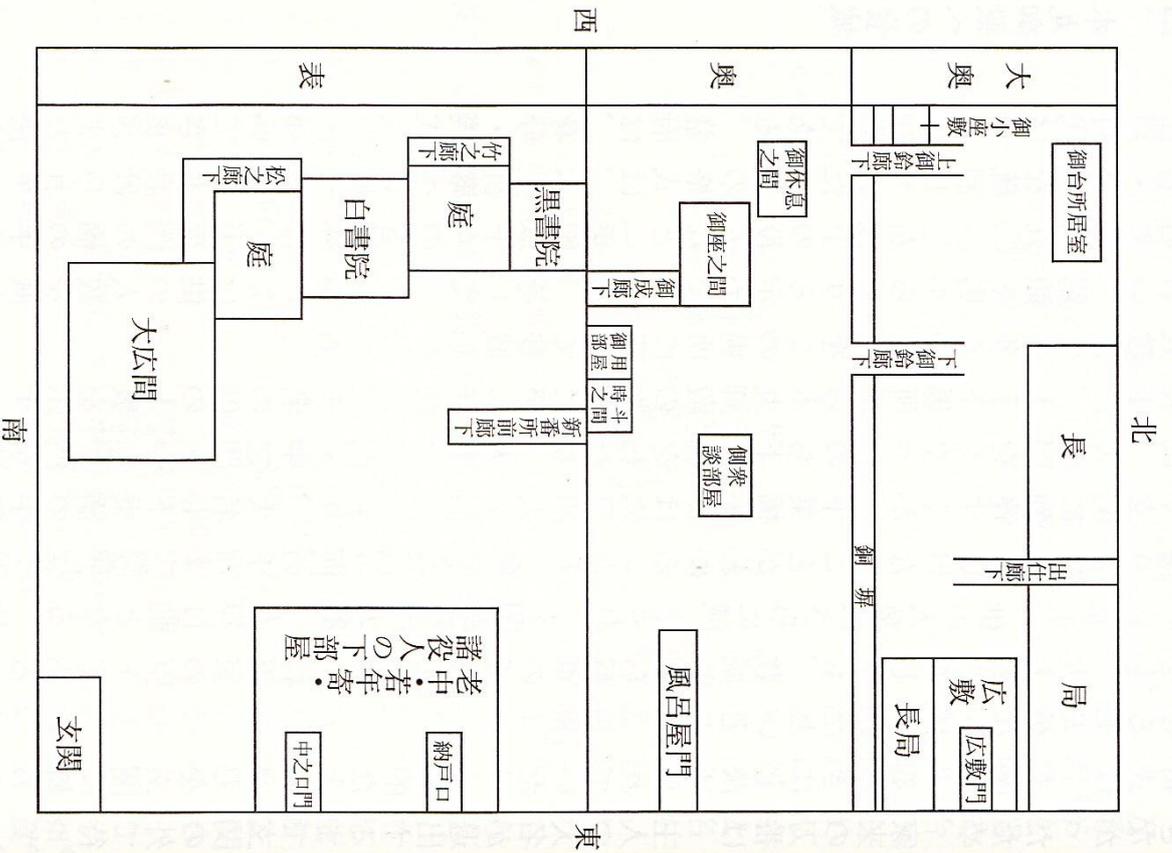


図2 本丸御殿略図



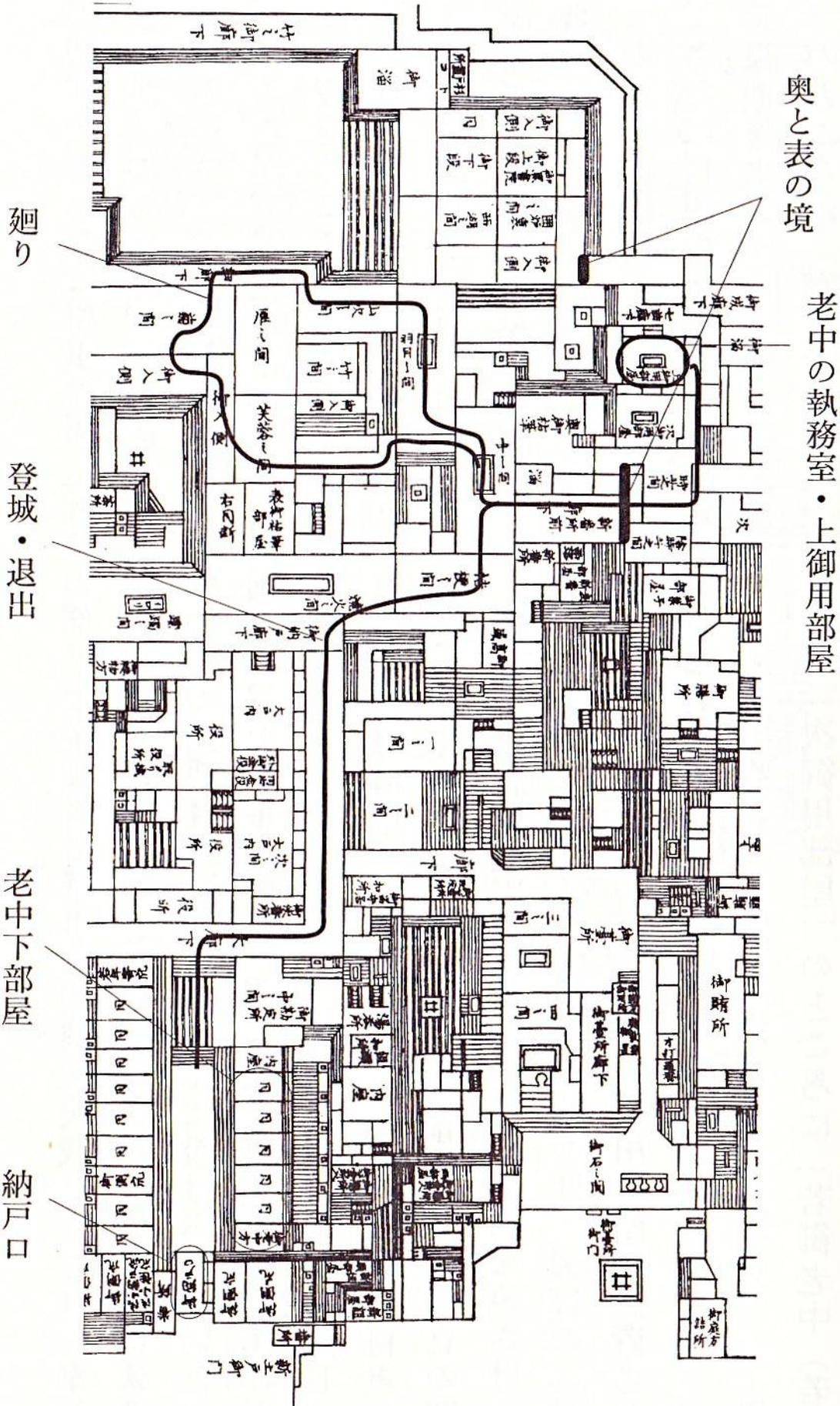
三、江戸城の中心、本丸御殿

本丸御殿（約一万三〇〇坪）は、用途により表・奥・大奥に三区分されていた。表は、儀式と政治の場である。すなわち、東側に玄関と老中・若年寄・諸役人の下部屋（控之室）、西側に儀礼や将軍との謁見に使用される大広間・白書院・黒書院と二つの中庭、中央部に諸役人の詰所や勤番士の番所、および大名・諸役人などの「殿中席」（以下殿席と略す、後述）となる座敷が配置されていた。

一方、奥は将軍の執務・生活空間である。表との境界は、御成廊下と時斗之間であり、表の役人は御座之間で将軍に御目見えする場合を除き、ここから奥へは入れなかったという。西側には、将軍の応接間として使用される御座之間、将軍の執務室や居間、あるいは寝所として使われる御休息之間などを中心に、湯殿や能舞台、東側には、将軍側近役人である側衆・小性・小納戸などの詰所が設けられていた。

また大奥は女性たちの生活の場であるため、奥との境は銅屏で厳重に区切られ、奥と大奥は上・下二本の御鈴廊下によってつながっていた。将軍の大奥での寝所となる御小座敷、御台所（正室）の居室、奥女中の詰所などがある御殿向、奥女中の住居である長局向、事務や警備を担当する広敷役人（男性）の詰所がある広敷向の三つの区域によって構成されていた。

図16 老中の登城・廻り・退出の図



註 「御老中方御登城絵図」・「御老中方表御座所廻り絵図」・「御老中方退出絵図」(名古屋市蓬左文庫所蔵) により作成

図7 礼服図

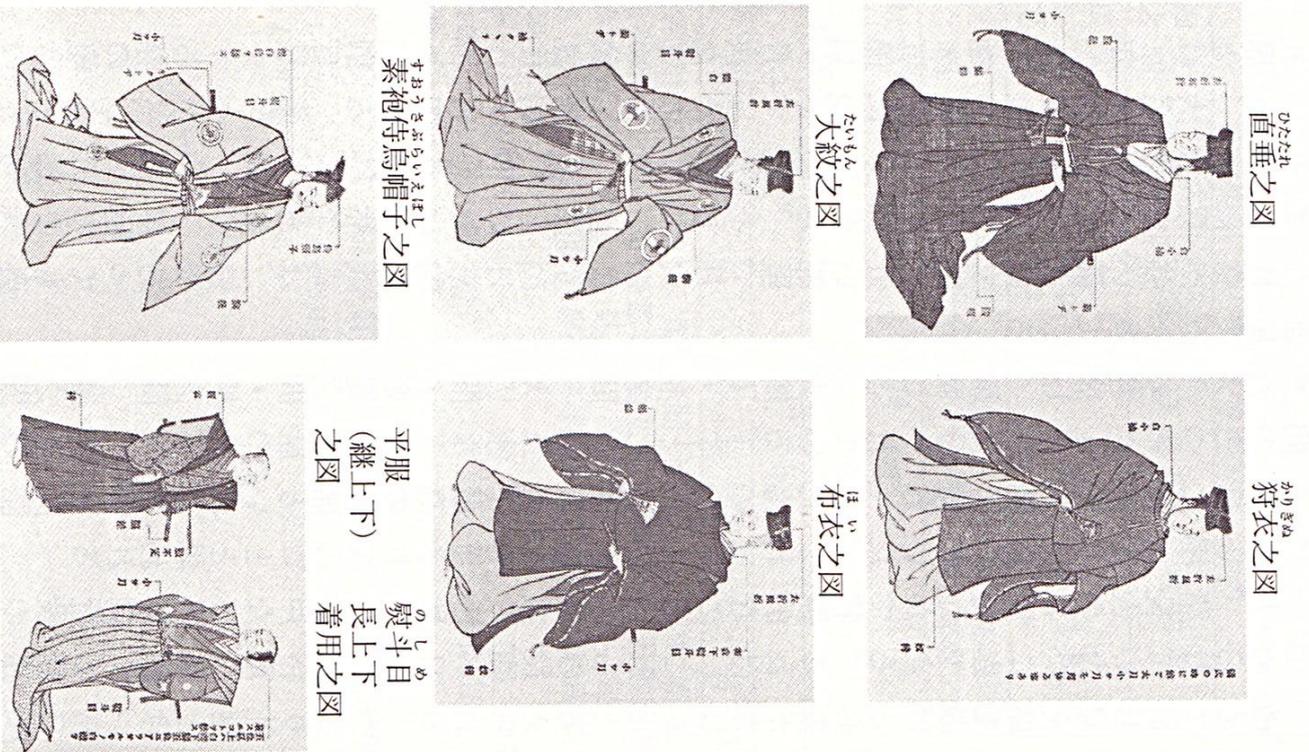


表9 装束着用機会一覧

と き	装束および着用者
正月元日 二日	直垂 (将軍家・侍従以上) 狩衣 (四品) 大紋 (五位の諸大夫) 直綏 (法印法眼) 布衣 (布衣) 素袍 (平土) 大紋白袴 (同朋) 鬘斗目十徳 (医師) 素袍 (喜連川家) 直垂 (半井、今大路氏)
正月三日 (禊初之式も)	鬘斗目長上下 (将軍家・出仕の面々) (素袍: 観世・金春・宝生・喜多等)
正月七日 (七種)	鬘斗目長上下 (殿中出仕の面々)
正月八日	継上下
三月三日 (上巳)	鬘斗目長上下 (出仕の面々)
五月五日 (端午)	染帷子長上下 (出仕の面々) (本日より諸人単衣)
六月十六日 (嘉祥)	染帷子麻上下 (万石以上、同嫡子、高家、交代寄合、無官の面々、雁之間詰の大名、奏者番、菊之間縁頬詰の大名、同嫡子とも、諸番頭、諸物頭、三卿家老、諸役人、寄合、留守居、大番頭の俵、医師、同朋等に至るまで)
七月七日 (七夕)	白帷子長上下 (出仕の鬘斗目着用身分以上の者)
八月一日 (八朔)	白帷子長上下 (万石以上・以下出仕の面々)
九月九日 (重陽)	花色紋付小袖 (出仕の万石以上の輩) 花色に限らず (万石以下)
十月亥日 (玄猪)	鬘斗目長上下 (連枝、溜詰、譜代大名、万石以上・以下、布衣以上役人、番士等)

註 市岡正一『徳川盛世録』320～321頁の表1より作成

註 市岡正一『徳川盛世録』(東京都立中央図書館東京史料文庫所蔵)より引用